小学2年生
国語

～国語科「スーホの白い馬」を通して、モンゴルを知ろう～

木村先生の話を聞く
©木村亮一

指導計画

- 「スーホの白い馬」を読んで、モンゴルの草原や生活を想像する。
- スーホの暮らしていたモンゴルの音楽や遊びを通して、モンゴルを疑似体験する。
- スーホの暮らしていた昔のモンゴルと、今のモンゴルの違いを知る。

使用した教材

- モンゴルの写真やビデオ　●馬頭琴
- モンゴルの民族衣装　●モンゴルのお金
- シャガイ（羊の骨の遊び道具）
- モンゴルの食べ物（ヤギのチーズ、ミルクティー、岩塩など）
- 「スーホの白い馬」
  （作:大塚 勇三　絵:赤羽 末吉　出版社:福音館書店）

学習活動

実践授業は東京外国語大学の学生、留学生（モンゴル人）と行った。

■モンゴルの生活を体験する

スーホの生活（モンゴルの草原での生活）を自分たちでやってみる。まず、クラスみんなでゲルを作り、その大きさや、中にある家具、家族の人数を知る。子どもたちの一日の生活は、朝、目を覚まし、馬のえさやりや水汲みの仕事をするところから始まる。外に出てバケツに水を入れて運ぶ。かまどの火の燃料にするために馬糞も拾ってくる。学校へは馬で30分もかけて行く。モンゴルの子どもたちは、4才頃には一人で馬に乗れるようになることを、モンゴル人留学生から教わった。どこまでも広がる美しいモンゴルの草原での生活は、子どもたちが思っていた以上に過酷で大変だということを、体験を通して知ることができた。

■馬頭琴の演奏

モンゴルからの留学生の馬頭琴の演奏を聴く
©木村亮一

「スーホの白い馬」はモンゴルの楽器「馬頭琴」の由来を伝える物語です。本文の中の「聞く人の心を揺り動かす」とある馬頭琴の音色を子どもたちはこれまでの学習で想像していた。今回の実践の中でモンゴル人の留学生が馬頭琴を生演奏してくださり、モンゴルの草原に伝わる美しい音色が、子どもたちの心に響きわたっていた。

■スーホの暮らしていた草原のモンゴルと、今の町のモンゴルの違い

これまでの学習で、子どもたちはモンゴルといえば草原が広がり、馬や羊がいることを知っていた。しかし、都市部のモンゴルの姿は見たことがなかった。写真でウランバートル（首都）の写真を見せると、「アメリカ!」「日本?」という反応があった。「モンゴルの町の写真です」と説明すると「えー、馬じゃなくて車がある!」「大きな建物もあるよ」と驚いていた。実は、草原での生活ができなくなってきていること、町の生活も日本とは違って、大変であるということを伝え、さらにモンゴルを知ろうとするきっかけとした。

モンゴルのチーズを観察
©木村亮一

2年生の感想（一部抜粋）

- 「モンゴルの子どもは、学校に行くのに、馬に乗って30分もかかるなんて知りませんでした。水汲みも重いのに大変だと思いました。」
- 「ぼくは、馬頭琴を弾けたのがうれしかったです。ゲルを川のそばに建てるのも初めて知りました。モンゴルのことが色々と分かってよかったです。」
- 「モンゴルにあんな大きな町があったなんて、初めて知りました。モンゴルの草原に住んでいる人は、馬の糞を火にすることも初めて知りました。」
- 「私は、モンゴルの生活で、朝四時に起きてお手伝いをするなんて知りませんでした。」